

市史編さんたより



(18)

都市化のなかの

現代史

第二次大戦の敗戦から今日にいたるまでの東村山の現代史を貫ぬく、大きな流れとして都市化の激しい動きを見ることができましよう。むろんこの動きは東村山のみでなく、日本列島全般に広まるものでありましたが、首都近郊地域としての東村山で特にその勢いは激しかったといわねばならぬでしょう。

この動きのなかで、地域社会の姿は大きく変わってきました。これまで

地域社会といえは大きく都市社会と農村社会にわけられ、この両者の間には異質の生活が営まれていたと考えられてきました。都市と農村の分業と対立とかと呼ばれる事態がそこでは指摘されてきました。ところが、都市化の動きのなかで、都市とも農村とも、一概に、また単純にわきまをこのできない地域社会が広汎に出現するようになりしました。一時期、

きました。同じ地域のなかで、農業従事者と非農業従事者がともに生活している、農地と非農地が併存している、そうした状況がいたるところで見られるようになりました。こうした状況のなかから、さまざま問題が出現してくるようになります。そのひとつとして地域農業の問題があります。都市化の動きのなかで、東村山の農業はどのように変わってきているのか、そして今後さらに農業を持続させる力があることすればそれはどのようなものであるのでしょうか。

昭和26年の事務報告書によると、当時の東村山の農地は田が25町2反、畑が28町2反と畑の比重が圧倒的に多く、農家も6戸という少なからぬ数を占めていました。作付面積で圧倒的に多かったのは甘藷(さつまいも)で28町5反のほり、そのほか麦類(小麦)や稲などが見られました。養蚕(かいこ)もおこなわれていました。これらの農業生産がその後どのように変わってきたか、またその担い手はどのようなものであったのかなど、現在さまざまな資料を収集して整理を進めているところです。しかし文書資料ではよくわかりません。関係者の方々に面接して、御教示戴かねばならぬこともすくなくあります。御協力をお願い致します。

現代担当 安原茂